



10月31日(土)小諸高等学校創立110周年・音楽科開設20周年式典とあわせ、音楽科第21回定期演奏会が小諸文化会館において、開催されました。また、長野公演は11月3日(火・祝)ホクト文化ホールでの開催となりました。今回は、出演生徒の感想をお届けいたします。

1年

今回の定期演奏会では、1年生として参加してわからないことがたくさんあって大変でしたが、終わった後の達成感が強く、とても楽しかったです。まず管楽ですがかなり難しい曲で最初はどうなるかと思っていましたが、最初はゆっくりとしたテンポから確実に練習したおかげで、みんなと合わせられるようになって本当に嬉しかったです。定期演奏会で演奏した後の拍手をもらった時はとても達成感を感じました。アイダ、メサイアではテノールを担当しましたが、なかなか難しく音程をとるのも大変でしたが、先輩や賛助の方の支えもあり、なんとか歌いきることができました。大変なことたくさんあったけれど、それ以上の達成感と喜びを感じることでできた定期演奏会でした。本当に楽しかったです。

1年

今年はずっと110周年、音楽科20周年という節目の年で式典が行われ、記念演奏という形で演奏することができて良かったです。最初に、アイダもメサイアも全然歌えなくて先輩に怒られたりもしました。悔しくて、もっと頑張ろうと思い、練習しました。その結果、授業中も頭から離れない程、大好きになりました。セッティングでは、最初何をしていたのか全然わからず、先輩に任せてしまった部分もありました。でも回数を重ねるごとに自分が決められた役割をしっかりと果たすことができるようになりました。この定期演奏会を通じて、普段あまり関わることのない合唱部以外の先輩と話したりすることができてそれも本当に良かったです。音楽科としての自覚を再確認し、一歩成長することが出来たと思います。来年もさらに素晴らしいといわれる演奏をしたいです。

2年

「ブラボー！」という歓声が聞こえた今年の定期演奏会。今回、音楽を通じてお客様との一体感を身近に感じられた気がする。特にアイダでは、曲が終盤こけて盛り上がりにつれて客席とステージの空気が一体になったと感じた。それらはとても熱気にあふれていた。ステージ上で自分たちの音楽や、お客様に伝えたいことを表現しても、実際その全てを伝えるということは難しいことだと思う。しかし、今回の演奏会では演奏者全員がとにかく全力で、お客様に感動していただけるような演奏がしたいという思いが一つとなり、その思いを一言一音に込められたことが、お客様に伝わる演奏になったのだと思う。私自身、それから音楽科として更に向上するために、まだまだたくさんの課題があると思う。今後、向上していくために今回の演奏会の感動や演奏面、行動面での反省を来年度に生かしていきたい。そして、出演者の皆様、三年生の先輩方への感謝の気持ちを忘れずに、今後も音楽を楽しみたい。

2年

今年はずっと110周年音楽科開設20年の周年行事があり、とても良い体験をさせて頂けたなと思います。そして、なによりもアイダの凱旋行進曲を吹くことができてとても嬉しかったです。私はトランペットで、昔から凱旋行進曲を吹いてみたいと思っていたので、吹けると決まった時は嬉しくて思わず叫んでしまいました(笑)練習中は、みんな音程がずれていて全然合わなかったり、本番前も少し緊張しましたが、納得のいく演奏ができたので良かったです。管楽の「春になって、王たちが戦いに出るに及んで」は、個人的に納得のいく演奏までできていないけど、全体的には良い演奏ができていたと思うので良かったです。周年行事があって大変だったのですが、たくさんの賛助の方や、ソリストの方と一緒に演奏をさせて頂き、とても楽しく、本当に感謝しなければいけないなと思いました。来年は更に良い演奏会を作りたいです!

3年

高校3年間、最後の定期演奏会を終えて、私はたくさんのことを学び考えました。休日の練習や放課後の練習は、最初のころは嫌なことだと思っていたけれど、三年生の今はこの練習がなくなってしまうことにさびしく思い、そして高校生活最後の定期演奏会を成功させたいと思うようになりました。パート練習のときも、先輩たちが私の指示をきいてくれて、一生懸命練習してくれてうれしかったです。三年間、ヴィオラをやり続けたことは絶対に自分の専攻のピアノにも影響してくると先生方に言われ、今は本当にこの小諸高校のオーケストラに入れて良かったと思っています。ピアノでも音色や全体のバランスが分かるようになったと思います。



3年

先日の十月三十一日、そして十一月三日に、音楽科の一年の集大成である定期演奏会が開催されました。私たち三年生にとっては最後の定期演奏会です。さらに十月三十一日の小諸公演は、小諸高校創立110周年、音楽科設立二十周年の式典を兼ねた大切な演奏会でした。今年の演目の見どころといえば、やはり「アイダ」でしょうか。パンダであるトランペットの輝かしい演奏の後、オーケストラが絢爛たる音を奏で華やかな合唱が登場する…。私はまさにこの「栄光」の曲を聴いた時、これほど音楽科設立二十周年の節目としてふさわしい曲はないと思いました。合奏を重ねるたびに味わい深い音楽となり、特に中間のバレエの部分は毎回その格好よさに、自分も奏者でありながらオーケストラに見入るほどでした。長野公演でのアイダの終盤、絶頂の盛り上がりを迎える中、ふと、もうこの仲間たちと演奏することはできないのだと静かに思い、涙がこみ上げてきました。合唱部としての最後の演奏中も、一年生の頃先輩方にお世話になったこと、二年生の頃先輩が来てくれて嬉しかったこと、そして三年生になってどんな時も笑いあったことを思い出しました。全てが最後の演奏会で、気迫というものを管楽の演奏からも感じました。ステージ裏で聴くその質の高い演奏は、今年も変わらず心地よいものでした。三年間歌い上げたメサイアも、もう歌う機会がなくても無意識に口ずさんでいくのだと思います。改めて、「音楽はいいなあ」と感じました。私たち三年生は、先生方、先輩方、後輩そして年に恵まれていました。三年間、このステージに立てたことを誇りに思います。最高の定期演奏会を共に作り上げてくださった全ての皆様、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

3年

今年度は音楽科二十周年という節目の年で、しかも自分が管楽の部長であり全体のリーダーという重要な係だったので、例年よりさらに質の高いものにしたい、良いものにしたいという気持ちが強かったです。準備の段階では、記念式典と定演の準備を並行してやっていかなければならず、大変でした。頭の中がいっぱいになってしまい、本番直前までに、細かいタイムスケジュールや舞台への出入りなど、全体に指示しきれなかったことが反省です。そんななか、二年生のセッティング係の方がセッティングに必要なこと(セッティングの分担や場ミリテープ作りなど)を事前に準備してくれました。例年ならその場でしていたことを、やってきてくれたことが本当に助かりましたし、感動しました。他にも、ここに挙げきれないほど、みんながそれぞれの係分担を全うしてくれました。これらが今回の演奏会の成功に大きく繋がっていると思います。これを来年度に繋げていこうとすれば、各係の責任者とセクションリーダーが集まり、ミーティングをしておいたほうが、情報が雑多にならず済むと思います。いかにして効率よくやっていくかが重要だと思います。アイダは、OB・OGの皆さんのお力添えのおかげでとても華やかなものになりました。三年目にしてアイダを演奏できたことはとても嬉しかったです。管楽も、アイダも、メサイアもあって、練習が体力との戦いでしたが良い思い出になりました。管楽のホルン奏者は、難易度が高く譜読みにも時間がかかりました。本番までに完成するか、とても不安でしたが、何とか通せるようになってよかったです。最後の定演でホルン奏者を演奏することができて良かったです。メサイアは三年目で慣れてきたので、集中力を高めようと思いました。曲への理解や言葉の発音などにも注意しました。本番はとてもまとまった演奏になったと思います。後輩たちには、これから先の演奏会をさらに良いものにしてほしいです。